

## 十 兩擔板漢の馬車馬式に

近代禪林の名徳、播州網干の盤珪和尚が、自分で安居を修した或年の事。諸方から澤山な雲水達が集つて来る。安居の中頃になると、毎朝の味噌汁にする味噌が、少し腐敗の氣味になつたので、納所の役をして居る大梁と云ふ坊さんが、氣をきかして、老體の和尚に萬一の事があつてはと、和尚の方だけ新しい味噌を取り寄せ、汁にして進じた。すると和尚は給仕の小僧に「この味噌は昨朝食べたのと違うでないか」と尋ねられ、「如何にも左様でござります、昨今味噌が少しわるくなりましたので、若い人は左程もあるまいがと納所殿が、和尚様だけ別に吟味して差上げられました」といふ。すると和尚は大喝一聲「大梁を呼べ」。大梁が早速まかりでると「今朝の味噌は拙老のために、別に取寄せたのであるさうなが、事實か」。「左様で御座ります、如何にも」と云ふより早く和尚は「よしそれでは俺に飯を食ふなど云ふことであるそれなら俺は食はぬ」と云ひもあへず、座を立てずと自分の室に入り、固く錠をおろして音も沙汰もない。驚くまいことか、大梁早速追ひかけて、袂にすがりお詫云はうとしたが、既に遅い。すまぬと、和尚の室の前に平身低頭、大聲あげて何遍もお詫したが、グーともスーとも返事がない。其の儘夜晝通して七日間。外では低頭平身、入口に這ひ屈んでお詫する。中では咳拂一つせぬ。無論兩方とも食ひも飲みもせぬ。

斯うなつては、驚かずに居られぬのが、外の雲水達。立代り入代り戸の外でお詫しても、何の響もない。七日の間も、食はず飲まずで堪つたものでない。捨置かば何時まで續くかも知れぬ。此上續いては大梁は死んで仕舞ふからと云ふので、大梁の爲に和尚に詫をすることに決し、其寺の檀頭とでも云ふべき人を頼んで来て、和尚に詫をして貰ふことになつた。その人も驚いて

早速来て見ると、和尚の室は堅く鎖ぢられてあかない。乃で室の外から「大梁は和尚に對して相濟まぬことをして、今日まで丁度七日間ほど平身低頭して居ります。御許がなければ、大梁は死ぬより外に仕方がありません、何とか罪をお許し願ひたう存じます」と云ふと。和尚もそれを聞いて「フム大梁も今日まで飲まず食はずにゐたか、それではたまらぬ」と云ひ乍ら、室の戸を明けて「大梁判つたか、其方は拙老の身の上を思ふ親切から致したことであらうが、然し之は拙老にはア、ダである、よくよく考へて見よ、他人に食はせないものを自分一人で食うて、人の師匠となることが出来ると思ふか、大梁判つたか」と云はれて。大梁も「如何にも御尤な次第であります」と和尚にお詫すると「モー二度とはすまいのー」というて、それで濟んだといふことである。和尚のエライことは申すまでもないが、七日間飲まず食はずに、自らの罪を謝した大梁も中々エライ。

大梁のしたことは、何も和尚を悪んでしたのではない、親切に和尚思ひの餘りにした事が、却つて和尚の精神に背いて、和尚の絶食となり、大梁は濟まないとの心から、御許の出るまでお詫する。其處に飽迄、師弟の情味が流れて居る。流石に何れも責任の自覺が厳しいだけ、自己の行くべき道に猛進する兩擔板漢である。彼の「一日作さずんば一日食はず」と云つた百丈禪師の如き、「君子は財を惜む、之を用ふるに道あればなり」と云つた佛源禪師の如き、確かに此種の老漢であります。

我等信仰によつて眞人生の生活をなす、須らく御恩尊とや、御慈悲有難やの板を兩方に擔いで、異學異見別解行人の言行に惑はさるゝなく、唯佛語の眞實なるを信じて、稱々念々無礙の一道を猛進し、かつて疑去退心を生じないのである。

序ついでに今いま一つ禪宗ぜんしゅうの話をはなししませう。それは妙心寺めうしんじの開祖かいそ、無相大師むさうだいし關山國師くわんざんこくしの求道物語きうだうものがたりである。國師こくしは年甫としはじめて二十一歳さい、當時政事たうじせいじ及び宗教しうけうの中心地ちゅうしんちたる鎌倉かまくらに於おいて、廣嚴禪師くわうこんぜんじに出家しゆつけし、居をること殆ほとんど三十年ねん。日夜研鑽にちやけんざんに暇いとまなかりしも、何等得なんらえる所ところもなかつたらしいのです。

時偶ときたま、鎌倉かまくらの建長寺けんちやうじに開山忌かいざんきが營いとなまれ、諸方しよはうから多くの出家しゆつけが集あつつて來る。これから開山堂かいざんだうに上のぼつて讀經どくきやうしやうとして、衣ころもを着きながら同參どうざんの坊三達ぼうさんに話はなされる。「今日我國こんにちわがくにには、あちらにも大和尚だいをしやう、こちらにも大善智識だいぜんちしきと、禪師ぜんじ智識ちしきは澤山たくざんにあるが、大和尚だいをしやう中の大和尚だいをしやうは誰たれであらう。「お前まへさん、まだそれを知らないのか、京都きやうとの紫野大德寺むらさきのだいとくじに、宗峯和尚しうほうをしやう（大燈國師だいたうこくし）が御出おいでになる、此方このかたこそ正まさしく夫それであらう」と、聞きくや否いなや、法會ほふゑも終をはらぬに、國師こくしは足袋たびはだし跣とで飛び出だし、東海道とうかいだう五十三次ごじゅうさんじを驅かけずり通とほしたのである。傳でんに依よれば、足袋たびを片足穿かたあしはいたまゝであつて、眼めに富士山ふじざんを見みずと、してあります。今いまの旅たびで、汽車きしやの中なかに寢ね込んで居あたら、富士山ふじざんを見みないで過すすこともありますが、昔むかしの五十三次ごじゅうさんじを徒歩とほで行ゆくのに、富士山ふじざんを見みないとは驚おどろいた。そんなあはてものに狼狽い者こくしかと云いふに、國師こくし既に五十一歳さい。血氣けつきに逸はやるのではなく、全まく求道きうだう聞法もんぽふの熱誠ねつせい、抑おさふ能あたはざるが爲ためであります。國師こくし亦また一個このよき兩擔板漢りやうたんばんかんであつた。

この勢いきほひで大燈國師だいたうこくしの居あまに怒鳴どなり込み、「如何いかんが是これ宗門向上そうもんかじやうの事こと」とやるや、大燈師だいたうし「關くわん！」と答こたへつゝ、袖振そでふり切きつて出でて行ゆかれた。サア五十三次ごじゅうさんじの關所せきじよは難なんなく通とほつたが、此この一字じには、國師こくし實じつに二年間ねんかんの參究さんきうを要えうしたと云いふ。此關門このくわんもんから拔出ぬけたのが、花園天皇はなぞのてんのうの戒師かいし、關山國師くわんざんこくしである。